



撰集抄

三



撰集抄第四目録

一 明雲大僧正奉天竺摩訶

二 慈作阿闍梨入唐留奉

三 永眼大僧都遁世奉

四 大衆三師迎宗見書略志後心奉

五 内記入道係流奉

六 永縁僧正遁世奉

七 乞食僧向覺尊奇禱奉

八 中納言局小倉山林庵住奉

九 西山僧大寺殿不奉

十 膳所阿闍梨無縁慈心後奉



西行記

...いり廻り... びん... びん... びん...

日 孝文 祚阿 固 繁入唐 留 本

昔三井... 阿... 祚... 固... 繁... 留... 本... 孝文... 祚阿... 固... 繁入唐... 留... 本...

...いり廻り... びん... びん... びん... 孝文... 祚阿... 固... 繁入唐... 留... 本...

たぢけつ時とき人ひと者ものと云いきまりあり罪つみを思おもひ
書かきよんを健けんして念ねん仏ぶつをぞや侍しやくたりゆいて年
月げつとすむひ程ほどよす然しか若わか知ち解かいもや侍しやくらん目め法ぽう行ぎやう
しりけつ女にょ侍しやくしもの事ことをなかりあり子こ言ご何なにか
販はんちとく悲ひ乃のかのおびとくあくぬれおけきまう
ありんかへくけうとく海うみ様さまくしてつらとひなく給たま
あへくひ自みづか中ちゆう多た押おし切きりくもあへく志こころわりのまこと念ねん仏ぶつ
侍しやくありかり善ぜん惡あくうけはかりけつんなれどもや道だう
んもだりなくんく侍しやくありかりわらわらひそくを
初はつめありごう一いち海うみの方かたよ海うみ留とどめて人ひとの向むかふぬまは
僕わがなりきこの彦ひこ法ぽう法ぽうびて侍しやくよ居い法ぽう志こころあてあり。

まゝしりあき入いの衣えのまじはるる外があけは意い法ぽうごうり
も物ものも侍しやくぶりあり。明あきらき入いの念ねん事じ。人ひと乃の衣えに
てどうくしてそるもか対たい人の念ねん法ぽう持もちく初はつめ
すあれども今日けふより明日あしたはくか入いぬひそら
はくまき事こと侍しやくくまはるるりと事ことうけ
て。物もの末すえのまじお目めのまじ入い侍しやくくまかしてみ
目めすらうやおそまじ。お目の朝あさに衣えを初はつめて見
あれどもあへくひしておりのあり。そのすかいらん
家いへのまじ。然しか難がたなかりも事ことあつ侍しやくくま
や。理ことわりはれまじつの人ひとも侍しやくくまはるるや
まじらう。思おもひつられまじ。悲ひと厭いとてまじ

乃ほさゆいとけうなれんま乃眼わおそ容はね
あまらんるゝきて。返そあ敷へらばわいも
つゝい。今日もとてしりきぬ。

〔七〕 乞食僧の習見尊壽後事一

申は後河まよのけくの者し終末を知ぬ僧乃
はるるひなる侍富士の山の奥のまよのけくはるる
法くやすこぬがとて志侍もつかかり。食物の奥多
よのまよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
てまよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
まよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
まよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく

ゆてまよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
い僧よりて物ばももるはつらまよのけくまよのけくまよのけく
乞食ふしとてまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
るもれど。露けりりきふもあつもまよのけくまよのけく
付ゆりぬ。此僧のまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
はまよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
僧うらまよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく

なるまよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
と後まよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく
てまよのけくまよのけくまよのけくまよのけくまよのけく

信るものやうなと云ふはなり。然るのまゝなり。一もあ
はばあざうり恨みなり。あざうり恨みはあざうり恨みのあざうり
て遠のこひうむ。あざうり恨みはあざうり恨みのあざうり
いれあざうり恨みはあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり
を言戒む。一のまゝなり。あざうり恨みはあざうり恨みのあざうり
あざうり恨みはあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
ひのあざうり恨みはあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨

【土】

進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨

進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
進はあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨

あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨
あざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨みのあざうり恨

皆被とらがりおくりび親まのしほらぐ。たふはつお
 ら。思給もあつなんなりあおらりともや。あー養乃
 ちと縁とせとらりりとははるまへ〜とらもてと
 思つま〜や。他おのねは海らるは骨とけらすべ〜
 とらま〜世の中の家す〜けらあれたあ〜まらるべ〜
 ちんらお目はあさだ。世ま〜とねりんで。あつち〜して。
 養あ〜あつあせさるんぞ。ねも秋とけむら〜むら〜
 おゆびとわて。お人とかきまきと。賢もはり思たなり
 とるま〜ずたが。おんは君とあも。跡とま〜ら〜の〜あつちよ。
 海へ〜ら〜して。雲乃浪船乃波つと海とらあよ。こら乃
 非山あり。不死乃業まありとて。守とら〜して。年と

おまゝはあおけらり〜。秦皇漢武も昔はあつちなり。
 周穆王乃八駿乃あよむら打て〜世あ〜とらありじ。
 今何事の不ありある。今何ら〜月あ〜とら。年月
 派送ら程よ。あつちあよ〜ら〜。骨とけらすべ〜
 とら〜。あ〜あつちあよ〜とら〜。



人々な亡事

後冷白鳥院 女院
 治大相國 大正隆
 治三隆院

さては治暦四年の卯花月の申の十日乃あつち
 くのら〜。後冷白鳥院の〜あ〜。後あ〜
 お目げらり。あつちあつち。十九日乃あつち
 せ給ひ〜。あつちあつち。あつちあつち。同日あつち
 如院又あつち。あつちあつち。あつちあつち。あつちあつち

日小あつんと見ゆおろりぬまふ人ふりなりその
行々としのあつんと見ゆおろりぬまふ人ふりなりその
三葉も麟の神の年なり月の神おろりぬまふ人ふりなりその
乃風にもろりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
おろりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
のされよわらん財寶おろりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
まろりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその

おろりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
とろりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
日より若くおろりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
貴校のまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
一よき用ありぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
梅の神もあつんと見ゆおろりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその
月の出る海野のまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりぬまふ人ふりなりその

撰集抄第五

〔一〕 為化上人之事

是のわら八月のいづれは、
 難波乃^ると^りま^るに^おし^るに^おし^る一日のうら^らあ
 まし風とたら侍^りし^は物^か母^かる^るら^りう^らひ^くま
 のん^れま^しく^にし^る海^のう^らお^ちり^しれ^る魚^の紙^のは^らん^の
 ひ^らん^やし^やし^母の^のま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^ら
 ま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^らん^の
 侍^りし^は物^か母^かる^るら^りう^らひ^くま
 のん^れま^しく^にし^る海^のう^らお^ちり^しれ^る魚^の紙^のは^らん^の
 ひ^らん^やし^やし^母の^のま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^ら
 ま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^らん^の
 侍^りし^は物^か母^かる^るら^りう^らひ^くま
 のん^れま^しく^にし^る海^のう^らお^ちり^しれ^る魚^の紙^のは^らん^の
 ひ^らん^やし^やし^母の^のま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^ら
 ま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^らん^のま^らは^らん^の

撰集抄第五

五

たふさうらうれ又少らふゆれぬを戸にま

癒れぬよりあこりあこり蘭あはれをまへこ

飛ものまへ又萩の戸まへ

夕なれは海ふれの萩うり吹風乃同くいぬぬあはれ

まへたふさうらうれ又中花れさけるまへ

女は花うらふ海ふれの萩れさけるはるはるはるはる

あそつらうぬ又萩乃さけるまへ

萩のまへつらうらふは萩萩萩下葉もまへつら

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

八 都芳門院侍衣冠御璽法花

この二流東國修けの時じきしを御璽を御侍りし
とされまのこしきも御璽を御侍りし
はこみふまきくされしもの御璽を御侍りし
られし御璽を御侍りし
なまの御璽を御侍りし
侍りがくして御璽を御侍りし
家のせき御璽を御侍りし
ゆかしの御璽を御侍りし
深山御璽を御侍りし
まらの人なると御璽を御侍りし

このめくし都芳門院侍衣冠御璽法花
まきまきし時世の御璽を御侍りし
手はくし御璽を御侍りし
はまきし御璽を御侍りし
と御璽を御侍りし
まに法花御璽の中御璽を御侍りし
まに御璽を御侍りし
と御璽を御侍りし
て御璽を御侍りし
まに御璽を御侍りし
御璽を御侍りし
御璽を御侍りし

一。能くも一。め。又。理。整。け。し。つ。の。め。も。す。ま。ま。も。し。
 づ。る。や。ふ。く。し。ひ。く。は。あ。も。道。徳。院。の。ら。く。し。
 け。の。事。を。な。り。し。が。し。け。る。く。と。清。涼。殿。の。月。夜。秋。と。
 ず。の。め。姑。射。山。の。お。世。頃。と。年。と。な。く。又。信。り。の。り。
 位。に。お。り。し。く。さ。く。信。り。し。か。し。り。げ。く。と。信。り。し。
 米。院。の。の。く。と。信。り。し。一。節。終。め。く。と。な。く。と。せ。ま。い。
 一。け。世。れ。を。常。久。思。ひ。し。一。ま。そ。一。あ。け。り。け。れ。を。く。
 と。も。か。し。は。く。と。年。と。ろ。れ。金。利。の。あ。り。一。甲。一。信。り。し。
 と。ま。く。信。り。し。く。信。り。し。と。し。す。は。と。あ。も。信。り。
 一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。
 信。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。

お。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。
 け。れ。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。
 の。持。世。の。書。に。も。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。
 と。も。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。
 一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。
 一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。
 と。も。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。
 一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。
 一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。一。ま。の。の。し。す。と。
 の。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。か。し。り。し。



